この物語は R-18 指定です。
そもそも18歳未満は神社モドキ自体を閲覧することをお勧めしません。
第2話もまだまだ OK ですが、話が進んで行くにつれ有害な記述が増えてきます。
JUNKMAN のポリシーとして特に具体的な警告はいたしませんが、読み進められる場合は自らの責任でそれなりの覚悟をしてお進みください。
なお、無断転載・翻訳の類いはお断り申し上げます。

ノモイの頸木・第2話
by JUNKMAN

＊＊＊＊＊

「ご紹介します。地球連邦政府のエリック・チャン広報官です。」

「はじめまして、広報官のエリック・チャンです。」

防衛軍長官に促されて事務総長執務室に入ってきた若い男とぎこちなく握手はしてみたものの、事務総長には全く状況が理解できない。

「・・・この非常事態に、どうして広報官が？」

「エリックは情報収集・情報分析・そして情報操作のプロフェッショナルです。」

「情報のプロフェッショナル？」

「はい、彼に暴けない秘密はありません。」

事務総長は納得できない。

「ホントかね？どんな秘密でも暴けるというのかね？」

「どんな、といわれますと定かではありませんが、大抵のことはわかります。多少、荒っぽいことをさせてもらっても良ければ、ですが。」

チャン広報官は、おとなしそうな風貌には似あわない過激な回答を、しれっと言い放ってみせた。
事務総長はそれでもまだ信じていない。

「それじゃあ、例えばキミたちが入室するまで、ワシがこの部屋で何をしていたか、言い当てることができるかね？」

事務総長執務室は窓もない完全な密室で、防音設備も完璧。
コンピューターのセキュリティは万全で、加えて隠しカメラ・隠しマイクなどが設置されていないことは毎朝確認されている。
いくら情報のプロフェッショナルと言っても、その中の出来事を知ることは不可能だ。
ところが、エリック・チャン広報官は無言で小さく頷くと、持参したタブレット端末を神の速さで操作し始

めた。

「・・・把握しました。」

「は、把握って・・・ワシがこの部屋で何をしていたか、把握したというのかね？」

「はい、おおよそ。」

「そんなバカな！はったりじゃろ?」

「では、その内容を申し上げてもよろしいですか？」

「ん？あ、ああ、いいとも。」

事務総長は心なしか少し狼狽しながら必要以上に強く頷いた。
エリック・チャン広報官は手元のタブレット端末を読み上げる。

「・・・防衛軍長官がこの執務室に入室されたのは午後 2 時 15 分です。それまでの 41 分間、すなわち午後 1 時 34 分から、事務総長は執務机に突っ伏して昼寝をされておりました。ランチタイムの終了は午後 1 時 00 分で、その時間きっちりに秘書さんがランチボックスを回収するため入室しましたが、その後午後 1 時 34 分まで、事務総長はこの部屋に施錠して、一人っきりで動画鑑賞されておられました。R-18 アニメです。タイトルは「おにいちゃんに、おしえて、あ・げ・る❤️」。抜きどころは冒頭から 8 分 42 秒後ですが、事務総長はその 2 分前には既にチャック全開で、ティッシュボックスを手元に引き寄せて準備万端でした。なお、使用後のティッシュは執務机右斜め後ろのゴミ箱に・・・」

「もういい！」

いたたまれなくなった事務総長はその場に立ち上がり、両手で机をたたいた。

「どうしてそんなことがわかったんじゃね？」

「はい、多少荒っぽいことまでさせていただけるなら、たいていのことは。」

「エリックの有能さが、ご理解いただけたでしょうか？」

「・・・」

事務総長はふてくされながら無言で頷く。
まあ、認めざるをえない。

「彼には早速この異星人の情報を収集してもらいました。ではエリック、プレゼンを。」

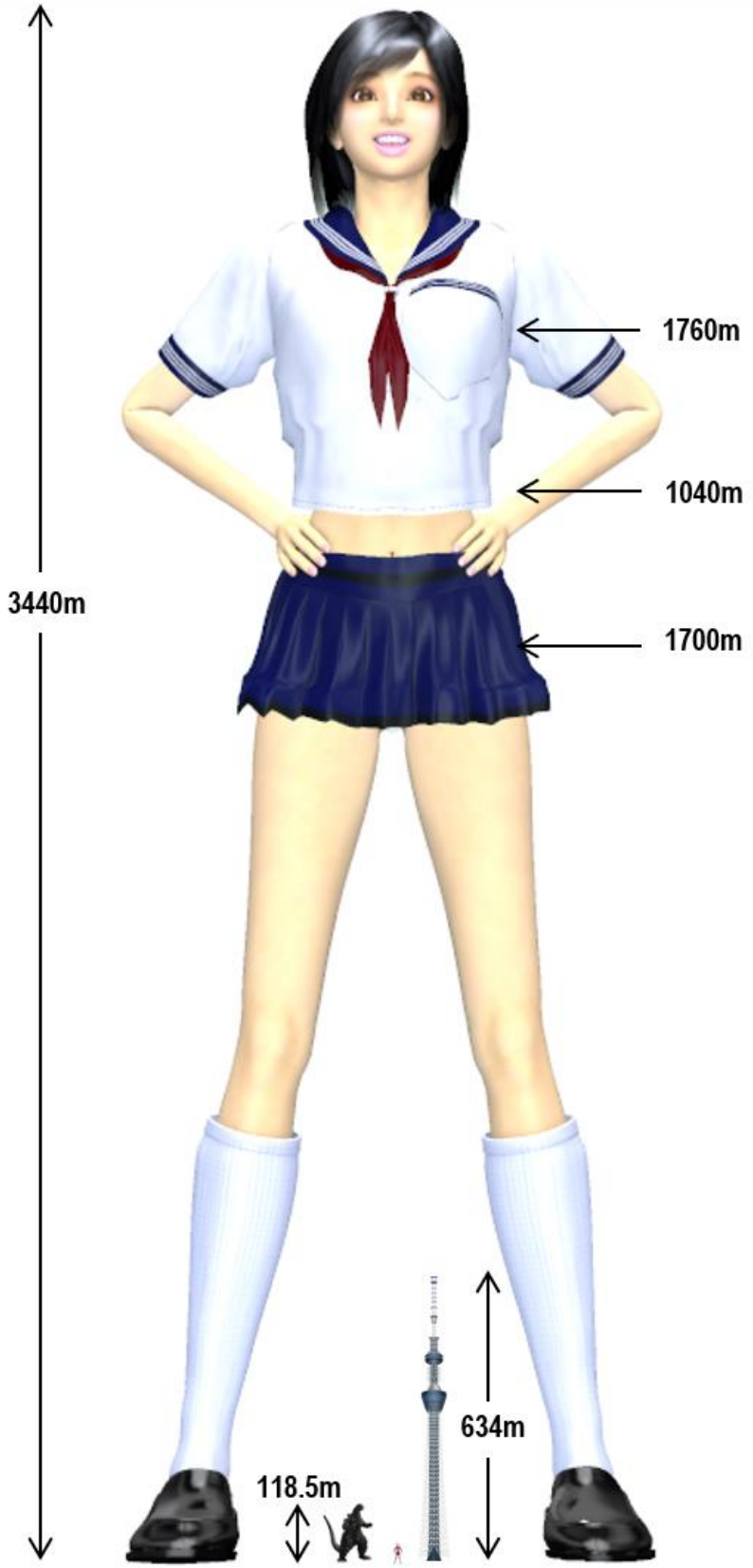
「はい。」

エリック・チャン広報官は、手早くプロジェクターの準備を始めた。

＊＊＊＊＊

事務総長執務室の 3D モニターに、あの超巨大女子高生型異星人の姿が映し出される。
チャン広報官は手元のタブレット端末を見ながら説明を始めた。

「これが彼女のサイズの測定結果です。身長 3440m、体重 400Mt、B1760m・W1040m・H1700m、わかりやすいように旧トーキョーに21世紀に建造された東京スカイツリー、また20世紀から21世紀にかけてたびたび旧トーキョーを訪れたとされる巨大生命体であるシンゴジラ、ウルトラマンなどを比較対象に置いてみました。」



「う、うわ、でかいな・・・東京スカイツリーがこの娘の膝にも届かんのか。シンゴジラなんか小ネズミみたいじゃし・・・で、ウルトラマンはどこじゃ？」

「よくご覧下さい。東京スカイツリーとシンゴジラの間にいます。」

「何？・・・あの小っちゃな点みたいなのがウルトラマンじゃというのか？」

「そうです。超巨大な彼女から見たら、身長40m のウルトラヒーローなど、アリンコに毛が生えた程度の惨めなこびとです。」

「うーむ、なんというサイズ差じゃ。これでは地球防衛軍の攻撃が全く効かんのも当然じゃな。」

事務総長は天を仰いだ。
チャン広報官は淡々と事務的にプレゼンを進める。

「彼女の衣服のデザインは地球人に擬態するためのフェイクです。」

「擬態って、あんなにサイズに違いがあるのに擬態になんかになるわけないじゃろ！」

「まあまあ事務総長、そこは異星人なりの考え方なのでしょう。エリック、続けて。」

「はい、あの巨大異星人の容姿、音声に加え、その衣服の材質などを超音波音響解析、X 線回折、

並びにレーザー分光分析で解析してみたところ、これは R108 星雲に特異的であることが判明し、中でもその第 1467 恒星系～2989 恒星系のいずれかからの来訪である可能性が 99.37%と割り出されました。これらの恒星系に高度文明を持つ惑星は 27 個報告されており、それぞれにコンタクトを取ってみたところ、第 1919 恒星系第 3 惑星、通称スンゲデッカ星宇宙局から、彼女はスンゲデッカ星人の渡航者、ユキ・シュライク・イッテラー18λJK である旨の回答を得ました。」

「なんと、もう人物まで特定できたのかね？」

「はい。」

「しかし、侵略者本人の惑星の政府に訊ねてみたのに、意外と素直に教えてくれるものなんじゃねえ。」

「確かにそこは不審に思いました。そこで、スンゲデッカ星と外交関係を持つ 487 個の惑星文明系から極秘で情報収集を試みました」

「ふむふむ」

「非常に評判が良いです。スンゲデッカ星人は超巨大な体躯に加え核兵器にも耐える強靭な肉体の持ち主であり、それでいて科学技術も進歩しているので、まあ武力でいえばほぼ無敵なのですが、ところが他星を侵略したことは一度たりともないのだとか。」

「？」

「ともかく遵法精神が徹底していて、法に定められたことには絶対に従う。言い換えれば、銀河星系間協定で禁じられている『侵略行為』なんて、絶対にするわけがないと。実際に今回も、スンゲデッカ星宇宙局の担当者は『侵略なんて、とんでもない』という回答で・・・」

「いやいや、現に地球に侵略してきとるじゃないかね。」

「しかし少なくとも『それはスンゲデッカ星政府の方針ではない』とのことでした。」

「どういうことなんじゃね？」

事務総長は全く理解できずに腕を組んで首を傾げる。
そこまで黙っていた防衛軍長官が口を開いた。

「・・・スンゲデッカ星宇宙局は、なぜ彼女の名前がユキ・シュライク・イッテラー18λJK であると即座に回答できたのかな？」

チャン広報官はは二度三度小さく頷きながら答えた。

「それは、ユキ・シュライク・イッテラー18λJK からこの太陽系への渡航願が提出されており、宇宙局はこれに対して許可を出したばかりだったからです。」

「ということは？」

「はい、彼女の地球への渡航は、きちんと法的手続きを踏んだものでした。」

「法的手続きって、我が地球には通告がなかったじゃないか！」

事務総長が机を叩いて抗議する。
チャン広報官は小さく首を振りながら答えた。

「地球への通告はスンゲデッカ星宇宙局ではなく、渡航者自身の義務となります。彼女は、故意か不作為かはわかりませんが、これを怠ったものと思われます。」

「う一む、それでは彼女は不法渡航者ということなのじゃな。」

「そうです。これは政府マターの侵略行為ではなく、彼女の個人的な脱法行為だったわけです。」

「何が遵法精神じゃ。ただの密航者じゃないかね。なら話は簡単じゃ。異星における違法行為取締規約に則ってスンゲデッカ星に通報し、当局に身柄を拘束してもらおう。うん、それで一件落着！」

「・・・お待ち下さい。」

再び防衛軍長官が口を挟む

「エリック、彼女が密航者であるとして、その彼女が密航先の異星で攻撃を受けたら、スンゲデッカ星の政府はどういう対応をとることになるのかな？」

「良い質問です、長官。」

エリック・チャン広報官は待ってましたとばかりに答えた。

「スンゲデッカ星政府にとって、自星人の身の安全は何にも勝る優先事項です。」

「まあ、それはそうだろうな。ということは？」

「攻撃に対する正当防衛としての迎撃は市民の基本的人権として認められます。」

「！」

「まず自らの身を守ることを最優先し、それに区切りを付けてから、密航行為について渡航先の政府と再交渉する。そこで渡航先の政府と交渉がまとまらなければ、そのときには速やかに帰星する。それでも帰星しない場合は、異星における違法行為取締規約に則って、スンゲデッカ星警察が身柄拘束のために来星する。そういう手順になるそうです。」

「・・・そうか」

防衛軍長官がゆっくりと頷いた。

「事務総長、わかりました。これはスンゲデッカ星人ユキ・シュライク・イッテラー18λJK の個人的犯

罪です。」

「犯罪？」

防衛軍長官は無表情のままもう一度大きく頷く。

「どんなに遵法精神の高い星にも、犯罪者はいる。犯罪者にとって、法などは、かい潜るための網でしかない。むしろ遵法精神の高い星で暮らしてきたからこそ、かい潜り方は巧妙になるのです。」

「ど、どういうことじゃね？」

「ご説明いたしましょう。」

防衛軍長官は立ち上がると、スクリーンの前に歩み寄って、事務総長とチャン広報官に向き直った。

「スンゲデッカ星人ユキ・シュライク・イッテラー18λJK が、地球に渡航するに当たって我々地球連邦政府への通知を怠ったのは故意でした。突然現れた彼女は見ての通りのあの巨大さです。地球人が巨大な彼女を侵略者だと思って攻撃したのも無理はない。ただ、それこそが彼女の狙いだった。」

「・・・」

「超巨大な上に強靭な肉体を持つ彼女にとって、地球防衛軍の攻撃など痛くも痒くもない。だが、攻撃されたという事実は残る。これを生命が脅かされたと認識するかどうかは、偏に彼女の主観に委ねられます。」

「！」

「つまり、彼女は『地球防衛軍の攻撃によって身の危険を感じた』と言い続けることで、正当防衛の名の下に地球上で『合法的』に破壊活動を行うことができるのです。そして地球政府がこの破壊活動に屈して彼女に全面降伏したら、彼女はその条件としてこの地球の支配権を得ると同時に、スンゲデッカ星宇宙局に対して地球政府からの在留許可証を送る。これで彼女の密航自体も密航ではなくなり、彼女は何の脱法行為もなくこの地球を所有することが可能になってしまうのです。」

事務総長執務室はしばしの静寂に包まれた。
誰もが黙りこくってしまったのだ

「・・・こ、これは・・・なんとかならんかね？」

重い沈黙を突き破って、事務総長が言葉を発した。
防衛軍長官が答えそうになるのを制して、エリック・チャン広報官が早口で回答した。

「試算によると、地球の持つ全リソースを投入するとしても、彼女の企てを退けられる可能性は0.00014%です。」

「0 ではない、ということか。」

「いえ、これは 0.001%未満と言い換えても良い、一言でいって、0 と何も変わらない絶対に無理な水準の数字です。」

「・・・だが、それでも 0 ではない。」

防衛軍長官は、静かに、しかし強い口調で続けた。

「0 でなければ、地球のために、わたしたちは戦う。それが地球防衛軍、そして地球連邦政府職員の、責務である。違うかね？」

「そんな無謀なギャンブルに身を投じることは、私の信条とは相容れませんね。」

チャン広報官は両手を広げて首を横に振りながら退室していった。
その後ろ姿を横目で見やりながら、事務総長は防衛軍長官に訝しげな目を向けた。

「・・・どうなんじゃね、あのエリック・チャンという男は？信頼できるのか？」

「見ての通り、有能な男です。」

「・・・」

「信頼できるかどうかはわかりません。ただ、有能な男であることは確かです。」

事務総長は苦虫を噛みつぶした。

＊＊＊＊＊

スンゲデッカ星人ユキ・シュライク・イッテラー18λJK は、ネオ・ナゴヤを完膚なきまでに蹂躙し尽くした。
彼女の大暴れは、もちろんこれでは終わらない。
進路を東に向けると、ゆっくり東海道を歩み始めた。

ずっしいいいいん
ずっしいいいいん

身長 3440m、地球人の約 2000 倍。
この巨大さなら、途中のネオ・ハママツ、ネオ・シズオカなどの都市を念入りに壊滅させても、目指すネオ・トキオ・メトロポリスに到達してしまうまでにはさして時間がかかるとも思えない。
ところが、その無敵の超巨大美少女の快進撃は、ネオ・トキオ・メトロポリスのすぐ手前、ネオ・ヨコハマでぴたりと停止

したのである。
彼女の鼻先に飛来した一機のヘリコプターが、その歩みを止めさせたのだ。

＊＊＊＊＊

ぱたぱたぱたぱたぱた
・・・
鼻先に小バエほどの大きさのヘリコプターが飛来する。
どうやら地球防衛軍のヘリコプターのようだ。
ただ、どうしたことか、一機だけでの単独行動である。
軍事行動とは思えない。
降伏宣言？
そんな予想は、ヘリコプターからの通信で覆された。

「・・・スンゲデッカ星からおいでになった、ユキ・シュライク・イッテラー18λJKさんですね？」

ユキは目を丸くする。

「どうしてボクの名前を？」

「失礼、いろいろと調べさせていただきました。なかなか巧妙な戦略ですね。感服いたしました。」

「・・・言ってることがわからないけど。」

「隠すことはありませんよ。敢えて先に相手に攻撃させることで正当防衛の大義名分を得て、あとは堂々と合法的にこの星の防衛軍を殲滅する。この地球という惑星でも、かつては大国が侵略の手段としてよく用いていました。」

「・・・」

「適度に敵に恐怖心を抱かせるような振る舞いをするのも巧妙ですね。これで敵は士気が失せ、降伏に持ち込みやすくなる。」

「・・・」

「ですが、ユキさん、詰めが甘いです。このままではマズいですよ。」

「何が言いたいの？」

「おっと、手荒なことはなしです。そもそも私はあなたの敵ではありませんから。」

「？」

「あなたの戦略の総仕上げを、この私がお手伝いいたしましょう。必ずお役に立ちますよ。あなたがこの地球の支配権を獲得した後に、私を十分に取り立てて下さる、という条件さえお認めいただければ、ね・・・」

ヘリコプターを操縦するエリック・チャン広報官は、巨大異星人ユキの目をみつめながらにやりと笑った。

＊＊＊＊＊

ノモイの頸木・つづく

次回予告
有能な広報官の裏切り。そして侵略者は自らの弱点を補うために意外な戦術を繰り出す。この圧倒的攻勢を前に果たして連邦政府は地球を守り抜くことができるのか？嵐を呼び風雲急を告げるノモイの頸木・第３話、請うご期待！